

報告者へのコメント

北原 敦

最初に社会史についてですが、長谷川さんの報告で戦後歴史学から現代歴史学への間にひとつ社会史が入るという主旨のように伺いましたが、二宮さんが社会史という場合、ちょうどレジュメに長谷川さんと成田さんそれぞれ別の箇所を参考資料として挙げているのでそこをご覧になってください。長谷川さんがレジュメに挙げている箇所で、二宮さんは「社会史は、どこまでも問いなおしを続けようとする歴史学、筆者がかつて用いた表現に立ち戻るならば、自らをも乗り越えてどこまでもはみ出していこうとする歴史学に付された記号にほかならない」（「戦後歴史学と社会史」2000年、著作集4）という言い方をしています。また成田さんがレジュメで挙げたところでは、二宮さんは「社会史という呼称は、それゆえ、状況のなかで生まれたのであり、つねに状況に立ち向かい、不断に自らをも更新しつづける歴史学を指す記号なのである」（「あとがき」『全体を見る眼と歴史家たち』1986年、著作集1）というふうに言っています。

二宮さんは社会史という言い方をしているんですけど、いま引用したように、それはどこまでも問いかけを続けて不断にはみ出していこうとする歴史学につけた記号なんだと言うのです。そして同時代的にヨーロッパでもアメリカでも同じような問題観が出てきて、いろいろな問いかけをしながら新しい歴史研究の潮流が生み出され、その中で特にアナールが社会史的傾向が強いと言います。二宮さんの書いたものをよく読んでみると、「アナールの社会史は」という言い方をすることが多くて、それに続けて「筆者自身は」と言って二つを並べることが多い。つまり社会史という潮流が同時代にでてきて、それが従来の歴史学に対して批判をし、問いかけを続けることで自分は一緒に歩んでいるけれど、社会史という一般に使われてい

る名称の中に自分の社会史も入れて一緒にしているというのとはちょっと違ってしています。そういう二宮さんの社会史の考え方の特徴があると思います。

それですから二宮さんは、社会史が何を対象とし、どんな方法なのかという議論の仕方でもなしに、実際に問いかけを続けていくわけですから、その問いかけから出てくるものが不断にはみ出していく、そういう研究のスタイルをとり続けてきたと思います。ある対象を分析するときに、これも注意して読むと、「先ず」と言って出発点や起点を強調するのです。例えば「ころとからだ」の問題が大切だと言うとき、それが大切だ重要だというのは、それを起点にしたうえで「きずな」または「しがらみ」として論じていく、その出発点として重要だということです。また日常生活世界にいったん戻ろうということのも、そこから出発し直すということであって、それをもって終わりと主張しているのではまったくないと言います。それにどのような社会的結合関係に立つかのソシアビリテも、そこがまず検討されなければそもそも社会集団の分類ができないのだということなのです。そのように「先ず」とか、そこに立ち戻るとか、そこから出発するとか、そういう対象の設定なんです。最後の作品のひとつ「歴史の作法」（2004年、著作集1）で、第一節が「初めに問いありき—「自分」と「いま」となっていて、「自分といま」ということはそれ自体重要なのですが、この場合も「問い」を支えるものとしてまず「自分といま」というところから出発するという言い方をしています。こういう具合に二宮さんは常に出発点を強調して、その出発点から次々に問いを発してはみ出していこうとするわけで、これが二宮さんが考える社会史、自分自身が言う社会史なんだと思われる

ます。

岸本さんの報告にもありましたが、二宮さんが構造という問題をどう考えるかということについて、これも問いかけを続ける中で、座標軸の転換（問題観の転換）と認識論上の転回を念頭にして議論を進めながら、ある時期から構造でなくて社会的図柄という表現を使うようになっていきます。二宮さんは幾つかの箇所、完結した構造という考え方ではなくて、ノルベルト・エリアスのいう社会的図柄ということが相関関係を考えていく上でふさわしいのではないかと述べて、結び合う関係性の図柄として歴史を捉え直す意図をこめながら社会的図柄という表現を用いることが多くなります。2005年6月号の『図書』（岩波書店）に、これは出版されたばかりの『マルク・ブロックを読む』に関連して編集部からの依頼があったのだと思いますが、「語られる歴史・読み取られる歴史」（著作集5）という小文を載せて、そこでも「書き手ブロックによって構想されたある歴史の図柄が秘められているのをみてとることができるのだ」と言って、ブロックの書いたものに対しても歴史の図柄という表現をするようになっていきます。これに続けて「しかもこれらの図柄は、読み手の読解行為を通じてこそ意味をもった歴史記述として立ち上がってくるのである」と言って、構造と図柄という二つの表現の違いに深い意味をこめています。

それからこれはいろいろな問題に関わってくるのですが、1977年の西洋史学会の報告「フランス絶対王政の統治構造」（吉岡昭彦・成瀬治編『近代国家形成の諸問題』1979年、著作集3）と1994年の西洋史学会における「ソシアビリテ論の射程」（二宮宏之編『結びあうかたち』1995年、著作集3）で論じられている中間団体の問題があります。長谷川さんの報告でも絶対王政の統治構造の中間団体に関して、これはどういうところからでてきたのだろうかということがありましたが、二宮さんは1930年代40年代のフランスのコルポラティ

ストたちの研究を参照して、そこからヒントを得て、それとソシアビリテ論を結びつけて絶対王政期の結合関係を考えたと言っています。この点はちょっと後にして、「フランス絶対王政の統治構造」の最後のところで、絶対王政の基礎にあった社团的・身分的編成が理念的に解体して、市民的結合に基づく国家へと原理的に転換することが指摘されています。理念的原理的な問題と限定した言い方がされていますが、実際にフランス革命を経て従来の身分に基づく中間団体から市民なり個なり、法的にはそうした状態になる市民＝個から発する中間団体が変わるとき、この二つの中間団体の差をどう考えるかということがでてきます。

94年の「ソシアビリテ論の射程」をテーマにした西洋史学会のときに、岸本さんがコメンテーターとして発言していて、そのうちソシアビリテと全体秩序との関連についてはその場でいろいろ議論されています。このほかに岸本さんは、個と共同性の問題として、これは身分制があるときと身分制が取り払われたあとの関連ということになるのですが、伝統的なコーポラティヴな結合が解体して、そのあとに個人による自発的な結合関係がつくられてくるというシェーマでいいのかとする問いかけをしています。けれども、これについてはほとんど議論されずに終わっており、その後もあまり議論されているようにはみえません。そこで、この問題に少し触れておきたいと思うのです。

二宮さんは先の統治構造について、コルポラティストの研究からヒントを得ているけれども、30年代40年代のコルポラティストには、ひとつには過去の秩序への伝統回帰的な志向があり、近代個人主義に対して中間団体に基づく社会の編成、国家の編成を回帰的に考えていることに同意できないとします。コルポラティストが近代に背を向けるのに対して、アギュロンは眼を前に向けて近代を前に越えようとしたのであり、自分はコルポラティストからヒントを得たけれども、その立場は取らないと言います。そしてもうひとつには、コ

ルポラティストは予定調和的であって、矛盾内包的ではないと批判します。こうしたコルポラティストへの言及は、ほかに『社会史研究』創刊号(1982年)の「<sociabilité>論のヴェクトル」(著作集3)でもなされています。

身分制に基づく中間団体と身分制が撤廃されたあとの市民的原理に基づく中間団体が、それぞれの国家ないし社会の編成の中で占める位置は当然違って来るわけですが、このところをソシアビリテ論でどう扱うかという問題がありはしないかと、私は考えています。ひとつの問題として、市民的結合に基づく国家へと原理的に転換したあと、これは長い時間を経てのことですが、次第に議会制民主主義のシステムが作られていきます。そこで単純に言って、議会制民主主義における代表とは何を意味するのか、誰が何をどう代表して社会の編成や政治の運営が可能になるのかということです。議会制民主主義における代表観念は基本的に地域と結びついて、まさにばらばらに個となった居住地の市民が単位とされます。そうだとすると、身分制が取り払われて個になった人間がもつ職能的役割は、代表制との関連でどうなるのか、どのような位置が与えられるのかという問題がでてきます。

二宮さんの絶対王政の統治構造では空間的・地縁的結合関係と機能的・職能的結合関係の二重の結合関係が成り立っていますが、市民的結合の原理による議会制民主主義のもとでは、この職能的結合関係は除外されることになって、代表制の中に位置を持ちません。社会の誰が何をどう代表するかに関連して議会制と職能団体の関係は、19世紀20世紀を通じてずっと議論されてきた問題で、コルポラティストの考え方の基本は、社会における職能的結合を代表制の中にどう関係づけるかというところにあるのだと思います。コルポラティストに同意するかどうかは別として、二宮さんが、近現代社会における職能的中間団体を身分制に基づく中間団体とどのように対比させ、かつソシア

ビリテ論でどのように考えようとしたのか、その点については「絶対王政の統治構造」から「結びあうかたち」にいたる議論の中で不問に付されているような気がします。

次の問題ですが、二宮さんが自分の社会史として考えるときに、きわめて重視しているのが権力の問題です。ソシアビリテ論とももちろん関わっている問題ですが、権力ということを二宮さんが考えなければいけないと思い立ったのは、おそらく1968年で、この年の諸事件と関係していると考えられます。先ほど成田さんが挙げた1999年の歴研大会での「戦後歴史学と社会史」(著作集4)の中で、1968年という年が注で二度でてきます。また1991年の藤原書店の月報『機』に載せた「アナールの現在」(著作集1)では「権力の問題が浮上したのは、あえていえば六八年の余波なんですね。68年の5月革命では、権力の問題にもろにぶつかる。その権力も単に政治権力だけではない、いたるところに存在する社会的権力であり、日常的権力であり、象徴的権力であった」と68年と権力の関係をはっきりと語っています。

実は68年は、権力と同時に代表の問題もありまして、少し前に遺著として出版された柴田三千雄『フランス革命はなぜおこったか』(山川出版社)には、革命直前のフランスで誰が何を代表するかをめぐる盛んに議論が起これ、そうした議論が新しい公共圏を生み出していくことが指摘されていて、大変興味深いのですが、68年の全共闘運動もある意味では代表の問題で、ポツダム学生自治会を否定して誰でもが直接的な表現をしようとするのに対して、大学当局はそれを代表として認めないことから決裂しこじれることになります。68年は、権力とともに代表の問題とも関連することを、先ほどの代表制の話の続きで一言つけ加えておきたかったのですが、二宮さんに戻るとい言いましたように「戦後歴史学と社会史」の注で二度68年に言及しています。ひとつは、「印紙税一揆」覚え書—アンシアン・レジーム下の農民

叛乱」(1973年、著作集2)という論文の基礎作業は60年代前半のフランス滞在中に行ったが、帰国後68年を経たのちに発表されたとして、「68年を経たのち」ということを注記しています。もうひとつの注では、「権力は国家のみではなく社会のあらゆる場・あらゆるレベルに偏在していることを考えるならば、解体すべきは国民国家の物語だけではない。それだからこそ、68年以後の社会史研究は、ソシアビリテと背中合わせになっているもろもろの権力を問題化してきたのだし、しかもそれらの権力が、人と人とが結ばれる絆というまさにその場で生まれてくるという厄介さを正面から受けとめようとしてきたのだった」と記しています。このように1990年代に二宮さんは、68年以後ということを非常に強調するようになっていますが、もちろん90年代になってそう考え始めたということではなくて、68年の問題が自分の社会史にとっても、また同時に顕在化してきたいろいろな社会史研究でも重要な意味を持っているはずなのに、その社会史的潮流が権力の問題をあまり自覚的に取り上げていない面があることを暗に指そうとしたのかもしれない。

そして見落としてならなのは、二宮さんが権力の問題とソシアビリテ論の関連を重視するとき、そこに権力を突き崩そうとする見通しを含めていることです。つまり、ただもろもろの権力があるということだけではなくて、『全体を見る眼と歴史家たち』の「あとがき」(1986年、著作集1)で書いているように、どのように人と人との結びつきができて、そこに権力が生まれてくるのかを考えるのは、「同時にまた、そのメカニズムを解体させるためには、どこをどう突き崩すことが必要かを探る」ことでもあって、どうすればそういう権力を崩していくことができるのかという問題がふくまれているのだと言っています。

二宮さんが歴史を制度や静態的關係で捉えているということなど全然無いのですが、2000年に日仏歴史家の国際シンポジウムがあって、その報告

集が2003年に山川出版社から『アンシアン・レジームの国家と社会』として出版されており、その書の「序にかえて」(著作集3)で次のように明快に述べている箇所があります。「特定の事件の具体的な状況のなかに、制度を投げ込んでやることである。その事件は、食糧暴動でも民衆騒擾でも密貿易でも軍事衝突でもよい。こうした歴史の現場に立ち合わせることによって、さまざまな制度はその社会的・政治的機能をあらわにするだろう。」

前に触れましたように、二宮さんはまず出発点をはっきりさせることを大切にして、そこから出発することが必要なのだと強調しますが、その先に考えているのは事件のなかに投げ込んでみるということなのだと思います。そうすることでいろいろな関係が動き出すのを見て取れるわけで、同じ「序にかえて」で印紙税一揆の例を引きながら、この叛乱の経過をたどるなかで「国家・地方・貴族領主・都市当局・教会等のあらゆる権力組織がいっせいに動き出す姿を垣間見ることができたのだ」と振り返っています。「印紙税一揆」の論文は、農民の叛乱を通してもろもろの権力の存在とそれら権力が動き出す局面を明らかにしているのですが、この論文は68年を経ることで完成できたといわさざ述べていることの意味は大きいと思います。

二宮さんはフランスに留学する前、これは一般にはあまり評判の良くない、大塚・高橋史学の総決算とされる『西洋経済史講座』(岩波書店、全5巻、1960—1962年)に、「領主制の「危機」と半封建的土地所有の形成」(1960年、著作集4)という論文を残して、これを置きみやげにフランスに旅立ちます。この論文に関して、『クリオ』のインタビュー(1991年、著作集5)で、あの論文は自分では非常にきちんと書いたもので、「ロゴス的には整理された論文」だけど、パトスの方向が見えない論文だと言います。「世界と自分との関係をそれで突破していこうというような、そういうパトスは、入れようが無い代物だった」と言うのです。

これに対して、留学から戻って最初の大きな論文である「印紙税一揆覚え書」は、パトスに満ち満ちた論文と言うことができ、まさにここに世界と自分の関係を突破していく新たな方向を盛り込んだと見ていいのかもしれない。

最後の問題として、岸本さんが文体の話しをされ、成田さんは「歴史の作法」を詳しく説明なさいましたが、「歴史の作法」で特徴的なのは、二宮さんが歴史認識について語るときに、認識だけでなく、記述をつけ加えて、「歴史を認識し記述する営み」というふうに必ずふたつを結びつけて、認識と記述をセットにしていることです。そこから、歴史認識と歴史記述における読解行為と物語り行為を論じていって、歴史記述のナラティブ性ということにいたり、さらに「歴史記述に固有のナラティブとはなにか」とする問いを発して論を進めています。報告でも長谷川さんからパーソナル・ナラティブ研究への言及があって、近年ナラティブの対象とか方法とか語り口とか多くの議論がみられるところですが、二宮さん自身に関して推測すれば、アンシアン・レジーム下のレチフ家をテーマとした「ある農村家族の肖像」（1983年、著作集2）の続編をナラティブとして書き継ぎたかったのではないのでしょうか。レチフ家の舞台であるトネロワ地方のサン村を最後まで何回か訪れていたそうで、おそらくそこに自分のナラティブを試みる場を見出していたのではないかと考えられるのです。けれども、そうした特定のテーマに限らず、二宮さんの作品全体を通して、その文体がすでにナラティブをあらわしていると言いたい気がします。

以上、大変雑ばくなコメントになりましたが、とくに報告者に質問するということではなくて、そのための時間を取るのではなく、フロアの皆さんの質問や意見と一緒にまとめて議論していただければありがたいです。